

月報 岡崎の教育 ☆ ☆

2月号

昭和63年2月1日
発行 / 編集
岡崎市教育委員会

「先生、朝ごはんの仕度してくるの。」
「そりゃ、そうだよ。でも、早いから子どもは私が出る時、やっと起きるの。」
「ふうん。でもいいね。トントントンって音がして、ふうんとみそ汁のにおいがするのって……。」

何気ないやりとりの中にふと覗く羨望
「あなたとこはちがうの。」

「うん、うち、ちがうの……。」
私に、聴くときのきらきら輝く瞳

中学生でもこんなことを思っていたのか
「もう大きいんだからほっといても」
つい、親も安心するのだろうか……

けれど、ちがう

中学生はアンバランス 心と体は別々
大人に反抗し あまのじゃくのようにふるまう彼ら

ほんとうは 求めている 温かな心を

（輝く瞳）



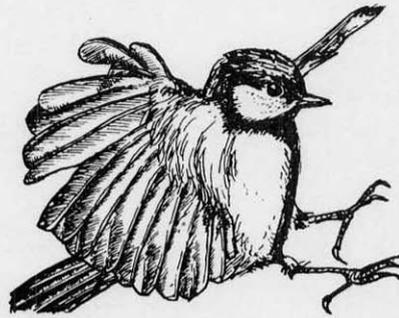
（葵中ギネスに挑戦 — 葵中）

われわれは、常々健康を願い努力を重ねている。これは人間の生命の尊さを認識しているからである。しかし、正しい知識を欠くが故に、直接生命にかかわることも、何のこだわりもなく行動することがある。雷に対する行動も例外ではない。わが国の落雷による死傷者は、平均して年間約四十名にも達するといわれている。自然現象は、時として人間にとって大きな脅威となる力を發揮する。春

— 教育随想 —

雷にねらわれ
ないために

神谷 清



日井市の中学校でサッカーの練習中、雷の直撃を受けて重体だった中学三年生の男子生徒も十六日朝、入院先の病院で死亡した。『高知県安芸郡東洋町の生見海岸沖約五メートルの海上で、サーフィンをしていた十一人の若者グループに落雷、男性六人が死亡、男性一人が重体、五人が重傷を負った』いずれも昨年新聞報道である。

頭上で稲妻が走り無気味な雷鳴が轟くなかを、何くわぬ顔で洋傘をさし、集団登下校をしている児童の光景を時々みかけ、はらはらすることがある。電気を専攻し学校教育にたずさわる者の一人として、子供の命を守るために、落雷対策指導の大切さを痛感するゆえんである。雷のすみかには、雷雲の発生メカニズムに関係がある。わが国の雷は、一般に夏が最も多く、関東地方から九州の太平

洋側の背後に山岳をもつ地方に発生しやすい。とりわけ関東地方の北部や近畿地方の鈴鹿山脈地域、九州の日田盆地は、雷にとつて最も住みごちがよい。これらは熱雷と呼ばれ、全体の五十九%を占めている。ついで気候の変わり目に、寒冷前線に伴って誕生する界雷がある。春秋で約三十七%、冬は約四%となつている。前線に誕生する界雷は、時刻に関係

なく出現する。

落雷を誘う要因は、雷放電のメカニズムが複雑なため不明な点が多い。しかし金属類、突起物、高い建築物、樹木などに対して落雷しやすいのは確かである。落雷直前の電圧は、気象条件によつてかなり異なるが、雲底の高さ一キロメートルの場合は約一億ボルトといわれ、最高では十億ボルトと考えられている。さらに、落雷時の電流は、数千から二十万アンペアである。このように雷は、とつともなく高い電圧と大きな電流が流れるので、感電したらたまったものではない。「ピカッ、ゴロツ」ときたら、どうしたらよいか考えてみよう。まず建物、自動車などの安全な場所へすばやく避難する。テントは、全く役に立たない。安全な場所のないときは、ヘアピン、帽子の金具、メガネ、時計、洋傘、その他金属性のものを体から遠ざけ、姿勢を低くする。落雷すると地表を電流が走るため寝そべったり、腹ばいになることは危険である。集団行動時の落雷は、被害を増大するので素早く散ることが肝要。運動場など広い場所は人体に落雷しやすい。高い樹木などや突起物のそばは危険。湿地は避けた方がよい。

落雷による人身事故の発生は、雷に対する認識の欠如と避難方法の不適切さに起因している。今後さらに人命尊重の観点から、より一層の安全対策の普及が望まれる。

(愛知教育大学附属養護学校長)

女教師の条件

国語科指導員

織田 和幸



ある学校を訪問した時のことである。教務主任の先生に案内されて教室へ行く。「今日から、『竹取物語』を勉強します。」大きな、くりくりした目で生徒を見つめる。ほほえみを浮かべた顔が美しい。早速、自作の「竹」の絵を黒板にはる。「先生、うまいねえ」と、生徒の声。「昨日、一生懸命、かいたもんね。」と、生徒に相づちをうつ。「先生、その絵、かぐや姫がいらないじゃない。」と、生徒もなかなかである。「かぐや姫は、先生がおるで、いいじゃない。」と、先生も機転をきかした応答である。先生と生徒の息がぴったりと合った導入である。

また、二十代前半の女教師である。授業の技術は、未熟な点もあったが、生徒をひきつけている。そんなやりとりを見ながら、ふと、斎藤喜博氏のことばを思



詩人

永谷悠紀子 氏

詩誌「アルファ」を主宰してみえる永谷悠紀子さんを緑丘のお宅に訪ねた。永谷さんは、附属中学校の事務官をしておられるが、公務以外の時間はすべて詩にかかわることで埋まっていると聞かれる。今回も、アルファの八十二号を発行したばかりの忙しい時間を割いて、いろいろとお話を下さった。

この道に入られたきっかけを伺うと、「戦争中の女学生生活だったものですから、文化に飢えています。女学校に東京の女教師を出られた、誠に斬新な先生がいっぱいいました。その先生の、『寺田寅彦のように、科学者でありな

がら、夏目漱石に俳句を学ぶような幅広いものを身に付けた人が尊敬できる』という言葉にとっても感銘を受けました。その頃は、あまりそういうものを与えられない時代でしたので、自分で自分を満たすために童話や詩のようなものを書いておりました。」

とのこと。

「学校を出て勤めておりました時、丸山薫さんが豊橋に疎開していらつしやることを新聞で知り、訪ねて行きました。海のように大きな先生で、紹介者もない小娘をとでも温かく迎えて下さいまして、先生の下に集まって詩の雑誌を発行している若い仲間の中に入れて頂きました。」

というような素晴らしい出会いもされた。その後、結婚されたり転居されたりして中断していたのが、岡崎で以前から詩をやっていた人たちに誘われてアルファを始めたということである。主宰の黒部節子さんが病気で倒られてからは、永谷さんが引き継いで現在に至っている。

丸山氏は、「日常的に健康でないとい詩は書けない。日の光の下でいい詩と想ったのが本物。」だといつも言われていたそうである。また、「若いうちは遊んでいて結構です。今のうちに、日常生活を豊かに、吸収できるものは吸収しておけば書ける時期は来るのですから」とも言われたとのこと。

「今が一番書くことに貪欲というか、熱心というか、うまく書けるんです。若

うちは、なかなかうまく書けなかつたけど、今やっている仕事など、先生が御存命なら褒めて頂けるのにと身にしみて寂しく思います。今は、仲間や友達がいるから、その人たちから、学び、盗むようにしています。」

大人の詩は、子供の詩と違い、テーマに合わせて自分の中で再合成し、練り上げていくので、言葉一つ探すのにもとても時間がかかると言われる。

「もうすぐ退職しますので、学校をやめると時間があるから、今よりたくさん書けると楽しみにしているんですよ。」と楽しそうに話して下さいます。真紅のカーディガンがともよくお似合いだった。

生年月日 昭和三年十月十六日
住 所 岡崎市緑丘三丁目十七番地三



い出した。「良い女教師の条件は、美人であること（笑顔）、頭のよいこと（機転がきく）、育ちのよいこと（素直）である。」

どう育てる

図工美術科指導員
長坂 正延

「絵をうまくしてやる。」

A先生の決意はこうだ。

造形活動の基礎として、やはり描画活動を忘れることはできないのではないかとすると立体作品に追われ、年間、描画を扱う時間が少ない今の中学校の美術を考えなおさなくてはいけないのではないか。描画を嫌う子供が多いのを理由に我々指導者が描画を避けているのではないか。

絵をかく時の自信のなさそうな生徒を前にA先生は、「三年間で絵を好きにさせてみせる。」と言う。

ことは中学校に限らない。

「何かいたらいいのかわかんないよ。」

「また、色ぬりで失敗しちゃった。」

「まんがのまねでもしとこうつと。」

こんなささやきが聞こえてきてはいささかさびしい。

A先生の授業のように、大きな目標に貫かれた授業ほど素晴らしいものはない。何よりも子供たちの目の輝きが違う。

この授業で、この題材で、子供たちをどう育てるのか。当然のことながら今一步考え直して、授業に臨もうと思う。

学園探訪

その2 心を育む保育園



幼児教育と義務教育との連携を深めたいと願い、人間としての基礎づくりで幼稚園と共に大きな比重を占める保育園を今回は訪問した。

幼稚園は文部省、保育園は厚生省の管轄である。従って、希望すれば誰でも入園できる幼稚園に対し、保育園には「保育に欠ける」という条件がなければ入園できない。これは保育園が福祉施設であるからである。

子どもを自然に遊ばせてくれる保育所ぐらゐの認識での訪問であったが、「自主性を尊重し、遊びを通して体育、徳育、知育の発達を目指す」という説明を聞き、子どもを見て実感する。

幼児にとつてけんかは社会性を育てるうえで必要なことの一つであるが、言葉が未発達なのですぐかみつく。その時は保母が相手になってやる。

保母にかみついた子どもはそれでストレスを解消する。落ち着いたところで赤くなっている歯型を見せて相手に対するおもいやりの気持ちを育てるといふ。

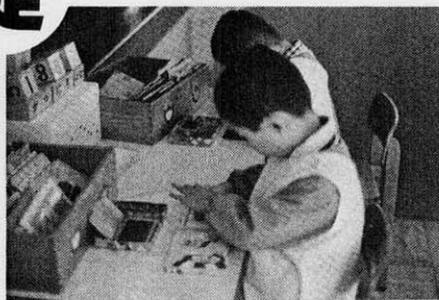
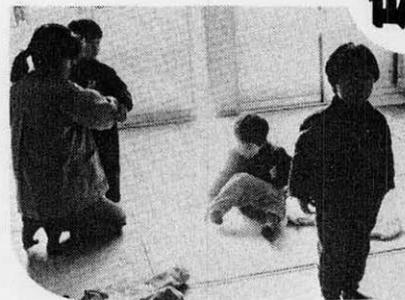
各園を訪問して共通して感じたのは、自主性を尊重し可能性を育てるためにどの保母さんも理論の裏づけを持った大変な実践家であるということであった。

年少さんはお母さんと離れた寂しさに保母さんになつわりついているが、年長さんは登園すると自然に挨拶ができる。この時期の成長はめざましい。出席ノートも日付を確認しながら自分で押す。幼くても上手に箸を使う。ズボンが上手にはけなく



礎

でも、自立を願い励まして自分でやらせ、仕上げだけしてやる。最近はずっと「挨拶しなさい」といいながら、自分は横で突っ立っている親もいるという。人間の礎ができるこの時期こそ、やはり親が背中教えてほしいとは園長さんの言葉。





創

保育園に時間割りはない。遊びが生活のすべてである。遊びの中でルールや、社会性や、創造性を学ぶ。それは生活科であり、総合教科である。ジャズダンスをしている子どもがいると思うと楽器演奏やスタンツをしているグループがある。小学校の運動会のまねだという。たとえ危険なことでも禁止はしない。怪我をさせない距離から子どもを見守り、どこからが危険かを体験させる。三本取りで編み物をしている子どもには驚いたが、先生の一言が子どもの無限の可能性とやる気を引きだした結果のようだ。



大人から見ればがらくた同然の空き箱なども子どもにとって制作の貴重な材料である。思い立った時にすぐ取りかかれるように手のとどくところに整理してある。
泣いている子どもと話すときは、目の高さを子どもより低



姿

くし、身体全体でスキンシップしながら話を聞いてやる。
ここにベテラン保育さんの姿勢がうかがえる。
0歳児も母親代わりの保育さんと一緒に安心しながら給食を食べる。まさに保育さんは母親である。



活

給食、掃除、飼育などの当番を決めてやらせているところもあれば、全く自主性にまかせている園もある。それぞれの園が描く子ども像に近い総合的に教育的配慮をしている違いである。
割り当てでも割り当てでなくとも子どもたちは実に生き生きと楽しみながら活動している。

ゆつくり育て根をはつて

羽根小

坂田希代子

四月に種まきした羽根小七組なかよしの木。

日に日に成長する子どもものように大きく育ったなかよしの木。

幹が伸び、枝を広げ、葉を繁げらせて、花が咲いた。

葉の一枚一枚には、七組の子どもたちの仲間の名がある。

通学団登校の折、自閉症のS夫の手をひいて通う四年のA君、

五年のB君。家に帰ってからも一人っ子のS夫のよい遊び相手である。

一緒に清掃活動している四年一組の子は、七組の子の性格からくせまでよく知っている。



机ふきのはずのK夫が廊下をふきはじめてしまった。

「K君、机ふこうね。いっしょにやろう。」ときそつてくれるのはC子さん。仏像の好きなK夫はC子さんの笑顔に一時みとれ、一緒に机をふきはじめる。

「Mちゃん、ごみ集まったよ。とつてね」と話しかけるのは、

D君、E君。ごみ取りの得意なM子は、まかせなさい、といわんばかりに「うん、いいよ」と勢いのよい返事をする。

集会委員のFさん、Gさん、H君、I君の名前もある。

山の学習に参加したY子のそばにいて、楽しい思い出を共につくれたJさん、Lさん。

修学旅行に行ったM子のそばには、Nさん、Oさんがいた。

運動会で一緒に旗のリズムを演じた二年生のP君、Qさん、Rさんの葉もできた。

学校生活に慣れ、余裕のできた一年生の子も、近頃よく七組の子と遊んでいる。もうすぐ新しい葉がまた生まれることであらう。

七組の子となかよしさんは、「なかよしカード」を作る。仲よく遊んだ時、一緒に活動した時、困っているのを世話してく

れた時にシールをはつて、カ

ドがシールでいっぱいになるとなかよしの木に葉が一枚ふえることになっている。そうしたカードが、常に五、六十枚ある。

あえて、宣伝活動は一切しな

いできた。ゆつくり伸びればい

い。でも、基礎のしつかりした

着実な伸びであつてほしいから。

真に心と心のふれ合う中でしか成長しない木、なかよしの木。永遠に成長し続ける木であれ。

教育日々



響け歌声

美川中

石川 利博

「先生、男子の音程がすぐ下が

るんです。これでは合唱コン

クールに優勝できません。」

N子が血相を変えて私に訴えてきたのは七月下旬。合唱コンクールは十一月、四か月前先だというのに。

中学校では学級の和を高めるために、さまざまなクラス対抗の競技会が開かれる。その中でも、生徒たちの熱気もつとも高まるのが校内合唱コンクールである。選手・補欠の別なく、文字どおり学級全員が平等な立場で参加できるからであらう。

どのクラスも優勝をねらっているが、私のクラスもその例外ではない。合唱部のN子を中心

に、七月には早々と曲を決め、練習を始めたのである。しかし

ただ何度も歌うだけでは上達しない。まずN子が合唱通信を発行し始めた。そこには音符の長さ、記号の読み方や意味などが書かれ、音楽の基本的な約束ごとをクラス全員が理解するのに役立つ。

合唱の練習を進めていくと、パートごとにそれぞれ異なった問題が発生してくる。これを解決するためにパートノートが作られた。毎日の練習の後、パートリーダーを中心に反省を記録し、明日の練習に生かすのである。

十一月になって合唱がほぼ完成すると、残る問題は舞台度胸だけということになる。これを克服するため、合唱訪問を行った。ST中に他のクラスにい

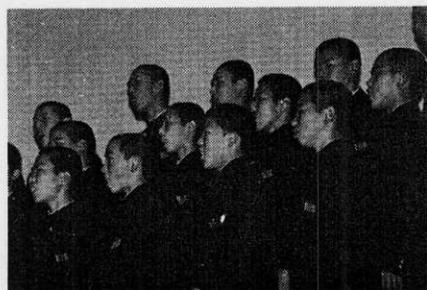
き

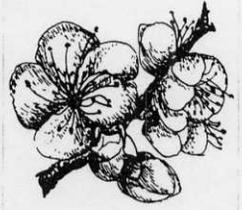
なり入りこみ、強引に歌を聴かせてしまうという乱暴な方法である。生徒は「なぐりこみ」と呼んでいた。「なぐりこみ」も回数を重ねてくると、あちこちのクラスから「来てほしい」と声がかかるようになり、のべ十五学級ほど行った。

こんな努力が実り、コンクールでは、みごと優勝をさらうことができた。生徒の一人は、こんな感想を書いている。

「クラス全員が協力して、クラス全員でとつた優勝。水泳大会と運動会の優勝より、合唱コンクールの優勝がいちばん価値あるものだと思う。」

今、合唱のレコード製作に全員が燃えている。教室から歌声の絶えることはない。





【寄贈刊行物・資料等】
共に伸びる 鈴木義治編
B 6 二〇八ページ

◆自作脚本集
水晶山ものがたり
香村克己著
A 5 二〇〇ページ

◆詩集「子どもたちの四季」
香村克己著
B 5 変形 一三一ページ

◆意欲と理解力を育てる学習指
導法 美合小学校著
A 5 二〇四ページ

県自作OHP・TP作品

岡崎から特選七点

愛知県教育サービスセンター
が主催する第十五回自作OHP
TP作品審査の結果が発表さ
れた。

岡崎市関係入賞者は、次の通
りである。

▽特選——七点

「にげだしたおにばば」(幼)

代表 酒井昌子(広幡幼)

「二・円の位置関係」(中一数)

犬塚尊夫(城北中)

「円と直線の位置関係」(中三数)

渡辺 誠(美川中)

「背をくらべる」(小一理)

斎藤敏子・三浦潤一

「酸素と二酸化炭素」(小五理)

森上葉子・稲垣たかみ

「植物の細胞分裂」(ソラマメ)

高橋啓三(矢南小)

山本信夫(美川中)

「学芸会のためのタイトル」(小特全)

香村敏之(岡崎小)

▽入選——十一点

小栗浩子(梅園小)

長島か

よ子(美川中)

杉山隆之(東

海中)

松浦由美(大門小)

河合美智代(大門小) 山田和

子(秦梨小) 米津典子(岡崎
小) 大和文子(甲山中) 島

津江万喜子(常東小) 東 忠
(大樹寺小) 大澤 峰(上地
小)

▽佳作——二十四点

梅園幼稚園職員(梅園幼)

野々山宏司(甲山中) 荻須文

裕(美合小) 高井幸子(矢南

小) 柴田靖子(大樹寺小)

坂田修子(矢東小) 内藤広光

(南中) 吉田章二(大樹寺小)

土屋恵子(上地小) 今枝武司

(秦梨小) 小林直美(美川中)

山田佳宏(甲山中) 山田賢平

(常磐中) 三木世紫枝(大樹

寺小) 向井伸ひとみ(矢東小)

岡本知子(大樹寺小) 加藤博

史(甲山中) 金原恵子(本宿

小) 浅井近(六南小) 鈴木

かをる(男川小) 竹内昭博(矢

作中) 森 竜師(井田小) 山

本健治(大樹寺小) 天野道晴

(井田小)

■冬季研修会終わる

第十四回冬季研修会が、去る

十二月二十五・二十六日の二日

間、岡崎市少年自然の家で開催

された。市内小中学校より三百余

名の参加者があり、元中日監督

近藤貞雄氏はじめ、七名の講師の

話に、終始熱心な研修を行った。

岡崎勢大活躍

県長距離継走大会

優勝・東海中

十二月二十五日、愛知青少年公園を会場に、県下五十チームが参加した本大会において、岡崎勢は六位入賞に三チームが入り、「岡崎っ子強し」を県下に示した。

本大会は、名古屋、東西三河、東西尾張の各ブロック予選を勝ち抜いた五十チームで競われた。全コース十九・四キロ(八区間)を八人のタスキの受け渡しで走り抜くものである。

東海中は前半出遅れたものの七・八区が大健闘。残り二百メートルで逆転。初優勝に輝いた。

また、竜南(四位)、竜海(六位)と三チームが上位入賞を果たし表彰された。

▽優勝……東海中学校
(五十七分二十三秒)

とも総力を結集してチームを編

選手・宇野正浩、酒井亮治
加藤裕則、藤田勝久
阿部 暁、山田一成
加能基博、青山 武
監督・柴田雅巳

▽四位……竜南中学校
(五十七分五十八秒)

▽六位……竜海中学校
(五十八分六秒)

▽四位……竜南中学校
(五十七分五十八秒)

▽五位……美川中学校A
(二時間三十四分三十九秒)

▽六位……常磐中学校A
(二時間三十五分十秒)

▽二位……竜南中学校A
(二時間三十三分三秒)

▽三位……福岡中学校A
(二時間三十四分十一秒)

▽四位……竜海中学校A
(二時間三十四分三十九秒)

▽五位……美川中学校A
(二時間三十四分三十九秒)

▽六位……常磐中学校A
(二時間三十五分十秒)

▽二位……竜南中学校A
(二時間三十三分三秒)

▽三位……福岡中学校A
(二時間三十四分十一秒)

▽四位……竜海中学校A
(二時間三十四分三十九秒)

▽五位……美川中学校A
(二時間三十四分三十九秒)

▽六位……常磐中学校A
(二時間三十五分十秒)

▽二位……竜南中学校A
(二時間三十三分三秒)

▽三位……福岡中学校A
(二時間三十四分十一秒)

▽四位……竜海中学校A
(二時間三十四分三十九秒)

▽五位……美川中学校A
(二時間三十四分三十九秒)

▽六位……常磐中学校A
(二時間三十五分十秒)

一区……寺田裕一(竜海A)

二区……小林龍雄(常磐A)

三区……桃井大輔(竜南A)

四区……大森 剛(美川A)

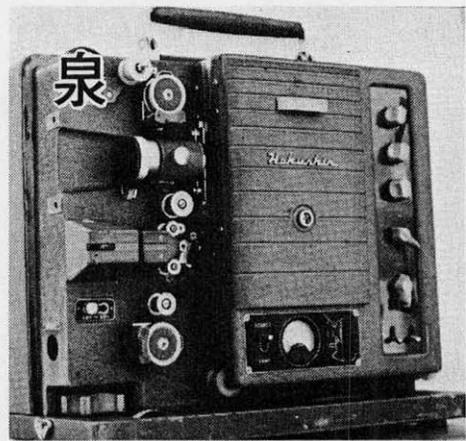
五区……鶴見康男(東海A)

六区……生田大晴(福岡A)

七区……加藤裕則(東海A)

八区……山田一成(東海A)

九区……杉浦 裕(福岡A)



ライブラリー

映写機

戦後、新教育の叫ばれる中で新しく取り入れられたもののひとつに視聴覚教育がある。

岡崎市においてもその重要性にいち早く着目し、昭和二十九年、県下で先がけて「岡崎市中学校視聴覚教育協会」を設立し、ライブラリーが誕生した。発足当時の教材、機材は社会科・理科大系シリーズの十六ミリ映画五十本、映写機は進駐軍から貸与されたナトコ一台を含め三台という規模であった。協会設立の目的にあるようにライブラリーは単にフィルムセ

ンターではなく、教材映画を学習に取り入れた学習指導の研究を積極的に推進した。

こうした新しい指導法は市内小中学校でどんどん取り入れられ、映写機も各校に普及した。教材映画や巡回映画の映写に限らず、学区での映画会に活躍して多くの人に親しまれた古い型の映写機も現在では軽量で画面の明るい新機種に替わり、当時のものはほとんど見る事ができなくなってしまった。写真の映写機は昭和三十六年から活躍した北辰SC7である。

・表紙写真
・表紙詩
・カット

葵 葵 南

中 中 中

中 中 中
根 石 優
洋 子 乃



- * ちよっとおかいぞ日本人 千葉敦子 ¥ 950
- 新潮社
- * ことばの四季 山本健吉 ¥ 1000
- 文藝春秋
- * お茶をどうぞ 千 宗室 ¥ 1000
- 日本経済新聞社
- * 学窓雑記 I 飯島宗一 ¥ 2000
- 名古屋大学出版会

- ※ 笑話寄せあつめ 宇野信夫 ¥ 980
- 廣済堂

戦前の東京には、寄席が方々にあった。しかし、戦後は数えるほどになり、今はほとんどなくなってしまった。それは噺家と名の人はあっても、ほとんどがテレビタレントになってしまったからだ。戦前の噺家は貧しかった。けれども、楽しそうに稼業にいそしんでいた。そんな昔をしのんで、劇作家の一人者である著者が、江戸から東京、そしてフランスから中国まで、面白い話の数々を集め、書きおろした笑話集。

（多勢の友達と仲良く遊べてよい。）
（配係として良く頑張りました。）

一例である。最近では、誤字・脱字が多く見られるようになった。ワープロを使用する場合には感じることであるが、文字を選択する段階で間違いが生じやすい。辞書で調べながら、慎重に記述していく心が大切であろう。

シ オ

詩人の永谷さんは言われる。初めからある程度できたものを書ける人は指導しやすいが、何も知らない人には教えるににくい。その点、先生は何も知らない子供を熱心に指導し、その力を十分に伸ばすことができず素晴らしいと。子供の可能性を引き出し、その力を見事に花開かせてやりたいと思う。

ス ア

愛煙家の住む世界が狭くなった。電車などでも、禁煙車より喫煙車が特別扱いになる御時勢である。愛煙家には気の毒だが、吸わない者にとつて四方から漂う紫煙は地獄の苦しみである。聞くところによれば、たばこの煙は人間ばかりでなく、パソコンのフロッピーにも大敵だそうである。

隙間風が身にしむ季節 というのは昔の話だろうか。新しい建築法、建材の進歩や暖房の発達で、火鉢に手をかざし、身を縮めて寒さに耐える風景は見られない。肌にしみる隙間風は防げても、人と人の心の間に吹く隙間風は逆に冷たさを増しているような気がする。